

氏名	小 森 淳 子
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第252号
学位授与の日付	平成15年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目	ケレウエ語の記述研究 ——文法・接触による変容・言語文化——

論文調査委員 (主査) 教授 吉田和彦 教授 庄垣内正弘 教授 佐藤昭裕

### 論文内容の要旨

本論文は、筆者が1997年以来タンザニア、ウケレウエ島でおこなってきた現地調査に基づき、文法記述を中心に、社会的、歴史的、文化的側面も合わせたケレウエ語の言語記述を試みたものである。ケレウエ語の文法記述は未だ包括的なものはみられない。本論文はケレウエ語の文法全体を網羅的に記述するものではないが、バントゥ諸語の文法の基幹をなす、名詞と動詞の形態および構造を中心に記述し、ケレウエ語文法の基礎となる部分を提示している。また、ケレウエ語がおかれている社会言語学的な状況は、言語使用のあり方と言語接触に関して興味深い事象を示している。アフリカのような多言語状況が常態である地域では、一つの言語が単独で存在するという事はまずあり得ない。他言語と接触し、共存する状況の中で、言語がどのように使用され、どのように変化していくのかという問題に対して、ケレウエ語と接触言語であるジタ語はその解答となる事例を提示している。また、どの言語にもその言語を話す民族の文化があらわれるが、ケレウエ語では特に人名とそれに関する言い換えの言葉、つまり「女性語」に、ケレウエ語の「言語文化」と呼ぶべきものが見出される。これまで記述されることのなかったこれらの言語文化を掘り起こし記述することは、貴重な言語資料となるばかりでなく、人間の文化と言語について考察する上での重要な材料を提供すると考えられる。以下に、本論文の内容を章ごとにまとめて要約する。

まず、1章では、ケレウエ語の概要として、その歴史と系統、ケレウエ語をとりまく社会言語学的状況を概観している。ケレウエ語の歴史の中で特筆すべきは、ビクトリア湖西岸地域に分布する同系のルタラ諸語から離れて、ビクトリア湖東岸に接するウケレウエ島に移動してきたことである。ケレウエ語はウケレウエ島で、その東側に分布するスグティ諸語と接触し、中でもウケレウエ島のもう一つの主要民族語であるジタ語と共存し、相互に影響を及ぼし合ってきた。

現在のウケレウエの言語状況は、ケレウエ語やジタ語などの民族語と、タンザニアの公用語であるスワヒリ語が共存している状況といえる。スワヒリ語は公的な場面での使用が義務づけられており、民族語に対して優位な位置にあるが、タンザニアの他の地域で危惧されているような民族語の衰退を加速させるほどではない。民族語が日常的に使用されているが、ケレウエ語とジタ語の使用で注目すべき点として、対話者同士がそれぞれの言語を話して理解し合えるという状況が指摘できる。ケレウエ語話者とジタ語話者は少なくとも相手の言語を聞いて理解することができる状況にあり、言語接触の実際の現場はそのような個人の言語能力と言語使用の場面にあることが示される。

2章から4章では、ウケレウエでの言語調査のデータに基づいて、ケレウエ語の言語記述を行っている。

2章では、音韻について論じた。母音と子音の音素を確定し、その表記法を確立した。表記で問題になるのは、形態素間で母音が連続するときに見られる半母音化や、母音の融合・同化、脱落、半母音の挿入などが起こる場合である。また子音では、鼻音の後ろにくる子音の破裂音化 (e.g.,  $h \rightarrow p/N\_ , \beta \rightarrow b/N\_ , l \rightarrow d/N\_$ ) や、軟口蓋音  $k, g$  が口蓋化して  $tj, d_3$  に交替する現象が見られる。これらの現象を分析し、音韻表記と音声表記を混在させるバントゥ諸語の表記の伝統にあわせながら、表記法を提示した。

3章では、名詞と名詞修飾語についての分析、記述を行った。バントゥ諸語は「名詞クラス」と呼ばれる名詞分類が特徴

的である。名詞クラスは名詞とその修飾語や動詞述部との文法的呼応を示す基準となるものであり、動詞の記述と並んで、ケレウェ語の文法記述の基幹をなすものである。バントゥ諸語の名詞クラスには、共通のクラス番号が振られており、どの言語の名詞クラスもその共通の番号を割り振ることができる。バントゥ祖語に再建されている名詞クラスは1クラスから23クラスまでにおよぶ。ケレウェ語には1から19までのクラスを見出すことができる。本論文での名詞クラスの分類は、名詞接頭辞の形態によって、従来の分類をさらに細分化したのが特徴的である。特に5/6クラスと9/10クラスには副次的な名詞接頭辞が見られ、6クラスの接頭辞 gaa- と10クラスの接頭辞 zii- の間にはゆれが見られた。

名詞の修飾語は修飾する名詞に呼応する。修飾語の呼応には、名詞の接頭辞に呼応するタイプと名詞の主語接頭辞に準じた接頭辞に呼応するタイプの二つがある。前者の呼応をする修飾語を「形容詞」、後者の呼応をする修飾語を「代名詞」と呼び分け、その呼応を記述した。また、名詞を修飾する機能を担うものとして関係節の構造について記述する。

4章では、動詞の形態論を中心に動詞述部の分析と活用の記述を行う。バントゥ諸語は動詞語根にさまざまな接辞を付加させて動詞述部を構成するのが特徴的である。動詞形態論はバントゥ諸語の文法の中では最も重要な部分であり、本論文のケレウェ語の文法記述でも中心となる部分である。

ケレウェ語の動詞述部の構成は、必須の要素を含む中核部分と、中核部分の外側に付加される副次的な接辞からなる。中核部分は、「主語接頭辞—TA 接頭辞—目的接頭辞—動詞語根—派生接尾辞—語尾」の順で接続される。このうち、目的接頭辞と派生接尾辞は任意であり、その他の接辞と動詞語根が必須の要素である。副次的な接辞は、中核部分の前に接続される前接辞と、後ろに接続される後語尾である。これらの接辞は音韻的、形態的に中核部分内の接辞と異なり、また副詞的な意味を加えることから考えて、中核部分とは区別されるべきであることを示した。各接辞の形態を分析して提示し、動詞の派生形および動詞の完了語尾のついた形をまとめた。

動詞の派生形は派生形接尾辞によって作られ、適用形、使役形、受動形、状態形、反意形、相互形などが見られる。動詞がこれらの派生形になることによって、動詞の態を変えたり、項としてとる名詞を増減させるなど、統語的な特徴を変化させることができる。適用形と使役形は項としてとる名詞を増やすが、その中でも「道具」の意味役割を担う名詞をとる点について、統語的な検討を加えた。

また、動詞の完了語尾のついた形は、動詞の活用にとって重要な形態であるが、動詞の語根や派生接尾辞によって、音韻交替や語形の変化を引き起こす。その規則は決して不規則なものではないが、単に音韻的なものだけでなく、語根の起源的な形態や派生接尾辞の形態も関与するので、形態ごとの個別の規則をまとめて提示した。

主要な動詞の活用形として、不定形、命令形、接続形、およびテンス・アスペクトの形式についてまとめた。特にテンス・アスペクトの形式は動詞の活用の中心をなすものであり、テンスとアスペクトの組み合わせにより網羅的に記述することに努めた。ケレウェ語のテンスに関する形式は「遠過去」、「昨日の過去」、「今日の過去」、「現在」、「近未来」、「遠未来」と名づけられる6つを挙げることができ、アスペクトに関する形式は「進行」、「習慣」、「継続」、「完了」、「遠完了／経験」の5つを挙げることができる。また、複合形式の前部要素がテンスを担い、後部要素がアスペクトを担うものとして分け、それぞれの組み合わせによるテンス・アスペクト形式の表示を提示した。特にテンス・アスペクトの形式を詳細に分析したのは、この文法形式に接触言語の影響やケレウェ語独自の変化が見出され、ケレウェ語の接触による変容を見る好材料となるからである。

5章では、4章での分析をもとに、ケレウェ語と接触言語であるジタ語との間に見られる変容の事例を、特に文法と語彙の点に絞って検討した。具体的には、ケレウェ語とジタ語に共通するテンス・アスペクトの形式を検討し、さらにルタラ諸語とスグティ諸語を比較することによって、ケレウェ語がどの形式を変容させたか、またジタ語にどのような影響を与えたかを明らかにした。

語彙の点では、これまでの先行研究や筆者の語彙調査の結果から、ケレウェ語とジタ語の語彙の類似度が、他のルタラ諸語、たとえばハヤ語とジタ語の類似度よりも高いことを示し、接触下にある言語が語彙の類似度を高めることを見た。その過程には語彙の借用関係があると考えられるが、過去の借用がどの方向でなされてきたかを知るのには難しい。しかし、現在のウケレウェにおいて実際に語彙の借用の状況が明らかになったことから、過去においてもこのような借用を通じて語彙を共有し、類似度を高めてきたであろうということがうかがえる。現在のウケレウェにおける語彙の借用の状況は、語彙テス

トの過程で、ジタ語の中にケレウェ語の語彙が混じることから明らかになった。このように、文法や語彙の点でジタ語とどのような相互干渉があったかを見ることは、ケレウェ語の歴史的な側面を明らかにする試みでもある。

6章は「ケレウェ語の言語文化」と題して、ケレウェ人の伝統的な名前と、その「忌避名」、そして忌避名から発展したと考えられる「女性語」の記述を行った。ケレウェ人の伝統的な名前は一般に使われている語彙からなっていて何らかの意味を表している。その意味によって、名前を「ちなみ名」と「あてこすり名」に分けて記述した。また、ケレウェ人の伝統文化として、嫁が舅の名前を発声することがタブーとされており、そのため女性は舅の名前の代わりに、「忌避名」ともいふべき代替の名前を用いなければならない。またそのタブーは、名前だけでなく名前に含まれる一般の語彙にまで及ぶため、それらの語彙を言い換えるための「女性語」が作られ、女性たちに用いられている。一般に、タブーとされている語や避けるべき語を言い換えるときには、婉曲語法が用いられる。ケレウェ語の女性語を分析すると、同義語や類義語、関連する語などを用いた言い換えが主であることが分かり、基本的には婉曲語法によって作られていると考えられる。このような造語法は、たとえば日本の「女房詞」にも見られるもので、女性語は言葉のタブーや言葉の言い換え、また言葉の性差について考察する材料を供するものである。

以上が、各章で扱ってきた内容である。個別の事象や言語の記述を中心に進めているので、一般化や理論化を伴うものではなく、必ずしも普遍的な見地からの考察が十分であるとはいえない。しかしながら、早急な一般化よりはケレウェ語の言語事実や接触による変容の実態、ケレウェ語の言語文化を確実に記述することがまずは必要と考え、現地調査で得たデータをなるべく整理した形で提示することに努めた。その結果、ケレウェ語の形態論を中心とする文法が多少なりとも浮き彫りにされた。また、ジタ語との相互干渉の実態を、ルトラ諸語とスグティ諸語の言語と比較することによって、部分的ではあるが明らかにすることができ、ケレウェ語の歴史的な側面を言語記述の中に盛り込むことができた。

フィールドワークによって得た言語データを、音韻、形態、統語の各分野で詳細に記述するのがフィールド言語学の基本である。本論文はそのような言語記述の基本に忠実でありながら、ケレウェ語がもつ社会的、歴史的、文化的側面を取り入れた多面的で総合的な記述を試みた。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、論者が1997年から合計7回、延べ13ヶ月にわたって、東アフリカに位置するタンザニアのビクトリア湖に浮かぶウケレウェ島で行なったフィールドワークの成果である。調査の主たる対象は、バントゥ系のケレウェ語という推定話者10万人の言語であるが、周辺の諸言語との比較も合わせて行なっている。ケレウェ語は、ビクトリア湖西岸のタンザニア側からウガンダ西部にかけて分布するルトラ諸語というグループに属する。このグループに含まれる言語としては、ほかにニョロ語、トーロ語、チガ語、ハヤ語などがある。ケレウェ語はこれら同系統のルトラ諸語から離れて、ビクトリア湖東岸に接するウケレウェ島に移動した。そしてウケレウェ島の東側に分布する別系統のスグティ諸語、なかでもジタ語と接触し、相互に影響を及ぼし合ってきた。本論文は4部8章と5つの付表を含む参考資料からなり、ケレウェ語の共時的な言語記述を主な目的としながら、ケレウェ語をとりまく社会言語学的状況や接触による言語変容、さらに言語文化的側面にも考察を施している。

第1部ではケレウェ語の歴史や社会言語学的状況について述べられている。現在のウケレウェ島では、それぞれ別の系統に属するケレウェ語とジタ語が共存する状態になっている。さらに、公的な場面ではタンザニアの公用語であるスワヒリ語が唯一の使用言語となっている。論者のフィールド調査はスワヒリ語を媒介にして進められており、注目すべき報告が随所に示されている。

第2部は本論文の中心であり、言語調査によって得られたデータに基づいて、ケレウェ語の音韻論および名詞形態論と動詞形態論の記述を行なっている。ケレウェ語が最初に記述されたのは、20世紀初頭のキリスト教宣教師による113頁からなる文法書においてである。これは貴重な記録であるが、体系的な文法記述がそこでなされているとは言い難い。また1980年以降、ケレウェ語を対象とした言語学的研究がいくつか欧米であらわれているが、いずれも現地調査に基づくものではなく、情報提供者のほとんどがスワヒリ語や英語が主である家庭環境に育った、都会の大学で学ぶエリートであるため、これらの研究は現在のケレウェ語を正確にとらえているとはいえない。この点で、本論文は現地調査に基づくケレウェ語の包括的な

文法記述をめざした初めての試みとして、高く評価される。

第3部では、ケレウエ語とジタ語との接触による言語変容の実態が、特にテンス・アスペクト形式を中心に検討されている。ケレウエ語とジタ語のあいだに類似した形式がある場合、両言語だけをみているだけでは、それが本来別個に存在していた共通の形式なのか、あるいは言語接触によって類似するようになった形式なのかを決定することはできない。そこで、論者はケレウエ語とジタ語には共通するが、ケレウエ語以外の他のルタラ諸語にはみられない形式およびジタ語以外の他のスグティ諸語にみられない形式に注目した。その結果、ケレウエ語との接触によりジタ語が取り入れたものとして「近未来」と「遠完了／経験」を表わす形式があり、逆にケレウエ語がジタ語から取り入れたものとして「昨日以前の過去」を表わす形式があることを明らかにした。これは、ルタラ諸語とスグティ諸語にみられるテンス・アスペクト形式を同定し、それらひとつひとつに対して広い視点から手堅い分析方法を施した意義ある結果といえる。

続いて、ケレウエ語の言語文化的な側面が論じられているが、特に興味深いのはタブーから発展してつくられた「女性語」についての記述である。伝統的なケレウエの習慣では、女性は結婚すると舅の名前を声に出して発することを禁じられている。タブーとなる対象に接してはいけないのなら、それを指す言葉も避けなければならないからである。たとえば、論者の調査協力者のひとりには Mazigo という名前の男性であるが、彼の息子の嫁は決してこの名前を口にできず、代わりに Malelembya と呼ぶ。Mazigo という名前は -ziga 「だます」という動詞からなるが、この -ziga を lelembya 「しゃべりすぎる」という動詞に置き換えているのである。さらにまた、Mazigo に発音が似ている iziga 「涙」や omuzigo 「荷物」に対しても、嫁は ilelembi と omulelembi という女性語を使わなければならない。このように女性語は、単に舅の名前に含まれている語だけでなく、発音の似た語に対してもつくられるようになった結果、ほとんどの語彙に対して女性語がつくられるようになり、女性が話すべき丁寧な言葉として機能するようになった。女性語については、ズールー語やコーサ語といった他のバントゥ系の言語にみられることがすでに報告されているが、ケレウエ語にみられる女性語の詳しい記述は本論文が初めてである。

これまで述べてきたように、本論文は、ケレウエ語の文法記述のみならず、社会的、歴史的、文化的な諸相を多面的に描き出した力作である。ウケレウエ島に住む人々のアイデンティティは「タンザニア人」であるよりも「ケレウエ人」であり、その拠り所のひとつがケレウエ語である。このような民族意識にもかかわらず、話者数が次第に減少していくことが予想される。論者には、今後、ケレウエ語の言語学的研究をいっそう進めていくことが期待される。また、周辺の言語についても、二次資料に頼ることなく自らの手で調査を手掛けていくことが望まれる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2003年3月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。